

昔々、あるところに、それはそれは綺麗なお姫様がいました。

お姫様は子供のころから、たくさんの人に愛され、すくすくと成長し、やがて年頃になると、隣の国の王子様と結婚することになりました。

お姫様はいずれこの国を継がなくてはなりませんので、お二人の結婚は、二つの国を友好的にするために、お姫様の国を守るために、とても大切なことでした。

隣の国の王子はとても優しく、穏やかな瞳を持った青年でした。

王子はお姫様に言いました。

「これから、二人仲良く暮らしましょう。あなたを心から大切にします」

お姫様は潤んだ瞳で答えます。

「わたくしもあなたを心から愛します。そしてお世継ぎを早く授かりますように」

お二人の結婚は、お姫様の両親である、国王様、お妃様だけでなく、国中の人々が祝福しました。

お二人の結婚式には、たくさんの人々がお祝いに駆けつけました。

「なんてお綺麗なお姿なんでしょう」

「とてもお優しいお二人。なんて素敵なんでしょう」

「早く可愛いお子様に恵まれますように」

「早く立派なお世継ぎに恵まれますように」

国中の人々がそう願っていました。

王子とお姫様はとても仲が良く、いつも一緒にいました。お互いのことを思いやり、いつも相手に優しくしていました。

ところが、三年、五年経つても、待望のお世継ぎはなかなか授かりませんでした。

「お父様も母様も、お世継ぎを心待ちにしています」

「早く、お二人を安心させてあげなくてはね」

二人はそう言い合いました。

ところが、それからさらに数年が経つても、お子様には恵まれません。お二人がご結婚されて、すでに十年近くの年月が流れていました。

違う国に嫁いでいったお姫様の妹様は、すでに二人の王子様に恵まれています。お姫様はだんだん心配になってきました。

「お医者様に相談したほうがいいのかしら」

お姫様はお医者様にかかることにしました。でも、特に悪いところは見つかりません。

規則正しい生活をして、ゆったりお過ごしください、といつも同じことばかり話すお医者様を、お姫様はだんだん信用できなくなっていました。

「街のはずれに住む女が、子供をなかなか授けられない人に、特別な薬を売っているらしい。一度呼んでみようか」

王子がそう言うと、お姫様は藁にもすがる思いで、その女を城に呼びつけました。女は黒ずくめの服を着込み、しゃがれた声でお姫様に薬を差し出しました。

「この薬を飲めば効果てきめん。すぐにでも玉のように可愛らしいお子様を授かるでしょう」

お姫様はすぐさまその薬を買いました。するとどうでしょう。お姫様のお肌や、髪が、これまで以上に輝いて、前よりずっと若々しく、いきいきとしてきました。

お姫様は嬉しくなって、王子様に言いました。

「前よりもとっても綺麗になった気がします」

「僕もそう思うよ。きっとこれで、すぐに子供も授かれるはずだ」

ところが、それでもなかなかお世継ぎは授かりません。

お姫様は、黒ずくめの女から、またもお、薬を買います。

「もっとたくさん飲んだほうが、効果が出ると思いますわ」

お姫様は女に、たくさんのお金を渡します。そして不思議なことに、その薬を飲めば飲むほど、お姫様は綺麗になっていくようでした。

けれども、お姫様と王子様の結婚を祝福した国民たちは、次第にお姫様の悪口を言うようになりました。

「あんなにお金を使って。すっかりお姫様は変わってしまった」

「綺麗になって私たち国民のことをすっかり忘れてしまわれたんだわ」

実際に、お姫様と王子様は、黒ずくめの女から買う薬を飲んだり、いかがわしい食事療法をすることに夢中で、あまり国民の前に姿を現していませんでした。

国王様もお姫様もすっかり年を取ってしまった。

「世継ぎもできず、この国の将来はどうなってしまうのだろう」

国王様は、弱った体のため息を漏らします。

「国王様、隣の国に嫁いだ娘には、王子が二人います。養子を迎えればよいのです」  
お姫様が懸命に励まします。

「ああ、養子を迎えれば、世継ぎ問題は解決する。しかし、子供を作ることにはばかり懸命になったあの夫婦に、この国の将来を任せるのはとても心配だ。いかがわしい薬ばかり飲んで、ちっとも国民のことを考えておらん」

国王様はさめざめと涙を流します。

国王様は何度も王子様とお姫様に、もっと国民のことを考えるように、人々の声に耳

を傾けるようにと注意をしていました。

その度に、お姫様は、昔と変わらず愛らしい笑顔で、小首を傾げながら答えます。

「お父様。分かっております。だんだんとあの薬が効いておりますから、もうすぐ、もうすぐいきつと子供を授かりますわ」

「その通りです。妻もまだこんなにいきいきと、綺麗なのですから、まだまだ何人でも子供を生めますよ」

国王は目を伏せました。

もう誰も、お姫様と王子様の話は聞いていませんでした。

二人は相変わらず、城の奥の部屋にこもり、黒ずくめの女から次々に買った、高価な薬を飲んで暮らしています。

あれだけお姫様と王子様のことを心配していた国王様もお妃様も、すでに亡くなってしまうしました。

国には、お姫様の妹が生んだ新しい王子様がすでに迎えられ、人々の関心は、その王子が娶るお姫様に移っていました。

お姫様と王子様に仕える城の者たちはみな、あの黒ずくめの女を魔女だと思っています。

ある日、ひとりの召使いが女に尋ねました。

「あなた、お姫様に一体何を飲ませているの」  
すでにしわくちゃな顔になった女は、しゃがれた声で答えました。

「ああ、あれはただの林檎水さ。ほんの少し蜂蜜を加えて薄めるだけさ。はじめのころは、それなりにいろいろ体にいいものを混ぜてたんだがね。もうその必要もないだろうね。あの愚かなお姫様だったらただの井戸水にでも大金を払ってくれるだろうよ」

今日もお姫様は潤んだ瞳で王子様を見つめます。

「早くお世継ぎを生んで、国民のみんなを安心させなくてはね」  
お姫様から林檎水を受け取った王子様も、昔と変わらない瞳で答えます。

「ああ、まだまだ君なら生めるだろう」

林檎水に映った王子様の顔も、お姫様の顔も、もうかつての美しい二人ではありませんでした。了